

《2010年9月例会報告》

【日 時】2010年9月29日（水）19:00～21:10（その後「ルン」～0:30頃。電車は池袋まで）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【演 者】井田征次郎（元 AC ミラン・アカデミー・コーチ）

【テーマ】イタリアから学ぶ、サッカー指導における視点の違い

【参加者（会員）18名】赤尾修（アミティエ・スポーツクラブ） 秋元大輔（サッカーライター） 阿部博一（日本サッカー史研究会） 井田征次郎（元 AC ミラン・アカデミー・コーチ） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 奥山純一（求職活動中） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 小池正通（杉並アヤックス） 幸野健一（三幸企画） 嶋崎雅規（帝京高校） 関谷綾子（静岡の弁護士） 高田敏志（町田高ヶ坂 SC コーチ） 田中俊也（三日市整形外科） 田村修一（フリーランス・ジャーナリスト） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 本郷由希（草サッカー／ヴィッセル神戸サポーター） 安松幹展（立教大学）

【参加者（未会員）4名】★角脇拓也（(財)東京都サッカー協会） ★古賀康彦（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科／石神井高校） ★鈴木智之（スポーツライター） ★真鍋洋平（石神井高校）

【報告書作成者】室田真人

注1) ★は初参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

イタリアから学ぶ、サッカー指導における視点の違い

井田征次郎（元 AC ミラン・アカデミー・コーチ）

<目 次>

1. はじめに
2. サッカー指導における視点の違い（報告者：井田氏）
 - 1) 日本と世界の差は何か？ 2) 文化の差？ 3) 視点の違い 4) 日本と欧州の違い
 - 5) なぜ日本ではこのような問題が起こるのか 6) 日本サッカーの問題点
3. ディスカッション
 - 1) 練習時間の考え方の違いと、練習以外の時間の使い方
 - 2) 地域によるサッカーの差
 - 3) 欧州型と日本型のトレーニングの違い
 - 4) イタリアの試合環境
 - 5) フィジカルトレーニングについて
 - 6) オンとオフ
 - 7) 指導者の哲学
 - 8) 子どもたちと指導者の関係
 - 9) おわりに

1. はじめに

中塚：9月の月例会をはじめたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の演者は、イタリアから帰国して間もない井田さんです。思い起こせば井田さんが大学4年生のとき、筑波大学附属高校で教育実習をしています。過去の資料をみると、教生日誌に井田さんの苦悩が綴られていたり…。

その井田さんがイタリアで勉強し、帰国されたということで、教育実習の指導教官として（笑）すごく楽しみにしています。

高田：本日司会を務めさせていただきます高田です。よろしくお願いいたします。まずは、井田さんから自己紹介をお願いします。

井田：皆さんこんばんは。井田征次郎と申します。現在28歳です。大学を卒業してすぐにイタリアに渡り、今年の7月末まで5年間、イタリアのペルージャとミラノの2都市に行っていました。

元々サッカーのフィジカルコーチの勉強をしたくて向こうに行ったんですけど、フィジカルだけでなく、監督のアシスタントをしたり、年代も5～6歳のスクールの子から、上は、アマチュアですけどトップチームまで、いろんなチームに携わってきました。

今回この場で話をする機会を頂きましたが、私が5年間イタリアで経験して感じたことを、皆さんにお伝えすることができたと思います。

ただ、今日発表することは、イタリアのサッカー協会が言っていることではなく、ぼく自身が感じたことですので、イタリアだからという考えではないかもしれません。ぼくがその場において感じたことをお話しさせて頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

2. サッカー指導における視点の違い（報告者：井田征次郎氏）

井田：本日のお題ですが、「サッカー指導における視点の違い」ということです。

そもそも海外に出ようというきっかけですが、ぼくは大学までプレーヤーをしていました。大したプレーヤーではなかったですし、サッカーの道で生きていきたいと思っても、サッカーに関する知識がそれほど優れていたわけでもなく、何か自分の武器になるものがほしいと考えました。その中で海外という選択肢があり、そのときの安易な考えなんですけど、サッカーの先進国に行けば、特別なものが得られるんじゃないかという淡い期待を持って飛び出していきました。

イタリア語も全くわからないまま、勢いで飛び出していったんですけど…。はじめはすごく理想を描いて行ったんですが、実際とのギャップもすごく感じました。というのも、結論から言ってしまうと、特別な何かがあったかといえば、なかったです。なかったというか、これをすればサッカーがうまくなるという…。考えてみれば当たり前なんですけど、特効薬のようなものはなかったです。

ただ、ぼく自身この5年間で、“視点の違い”というのを持てるようになりました。

その“視点の違い”について、本日はお話しさせて頂きたいと思います。

1) 日本と世界との差は何か？

向こうに行ってギャップを感じた部分ですが、まずはじめは、アマチュアからプロのチームの練習や試合をみていたんですが、はたからみていただけでは、特別なものがあるなんて感じなかったですね。練習でも特別なことをやっている雰囲気はありませんでしたし、へたをすると日本の方が工夫されたトレーニングをされているんじゃないかという印象を受けました。

そこで、「日本と世界との差は何か？」ということを考えてみました。日本人の技術は決して低くないと思います。特に育成年代の選手においては、日本人の方が外国人選手よりも高いです。止める、蹴る、ドリブルだとか、日本人のレベルは高いと思います。

ただ、後々考えが変わってきたのですが、当時考えていた「技術」と、いま考える、サッカーに必要な「技術」とは違うのです。この点は、後ほどご説明させていただきます。

日本人はトレーニングに真面目に取り組み、練習理解度も高いです。日本のチームがイタリアに来たとき、イタリアの指導者たちはここをまず言いますね。練習に対する取り組み方、姿勢、あとは吸収するスピードも非常に高いです。向こうの子どもたちが、何週間、何ヶ月かかっていることを、素早く理解してやっています。それは、イタリアの指導者たちも羨ましがっています。ここは日本人の素晴らしい部分だと思います。

ただ、先日ぼくの友人で、スペインで指導者の勉強をして、いま日本に帰って子どもを指導している人が言っていたんですけど、日本人はたしかに習得するスピードは早い。けれど、忘れるスピードも早い、と。

俊敏性に優れ持久力も高い、ということですが、日本人は欧米人に比べて身体的には小さいですが、一瞬のスピードに優れ、また持久力も決して劣っていないということも感じています。ただ、この持久力というのも、先ほどの技術と一緒に、当時と考え方が変わっています。

練習量についてです。イタリアのトレーニングの量ですけど、1回のトレーニングは1時間半から2時間です。育成年代ですと週3回ほどで、プロクラブの育成でも4回しかトレーニングしません。ぼくが小さいころや選手時代に毎日トレーニングをしていたのと比べると、明らかにイタリアの方が練習している量が少ないです。

2) 文化の差？

こういったことを考えても、日本と世界とでは差があります。その差は何であろうかということ、疑問に思っています。最初に少し話したんですけど、トレーニングをはたから見ていただけでは特別なことをしているとは思えないのに、なぜこういった差が生まれるのか。

イタリアに行った最初の数年は、サッカーに対する歴史や文化の差が大きいのかなということばかり思っていました。

イタリアのサッカー文化の特徴ですが、毎日流れるサッカー番組があります。向こうでは週末に試合があって、それに関するテレビ番組がほぼ毎日流れています。サッカーの試合自体は、日本と一緒に有料放送でしか流れていませんが、ほとんどの家庭で有料放送に入って試合をみている。入っていない人たちは、近くのパールに行ってみています。そういう「みる文化」というのは、日本に比べて非常にあるのかなと。

特に、サッカー番組なんですけど、日本の場合、結果やゴールシーンを中心に流すのが多くですし、イタリアの場合もちろん結果は流しますが、その後に討論形式の番組がすごく多いんです。日本の番組では、1人の専門家がそのプレーの解説をするという形が多くあります。1人なのでその人が言ったことが正しくなってしまいます。向こうの場合は、元選手や元監督が専門家としていたり、現監督や一般のファンの方もいたり、そういう人たちが自分の意見をざっくばらんに言い合うんです。ときには番組内で喧嘩をすることもあります。1つの答えを求めているのではなく、それぞれが意見をぶつけて討論し合うという形式です。

サッカーでも答えはありませんが、それぞれが意見を持ってぶつけ合って、これはこうだったんじゃないかなと言い合える文化があるんじゃないかなと感じます。

スポーツ新聞の8割がサッカーのネタです。これはサッカーの文化があるんだと非常に感じる部分です。イタリアでは三大スポーツ紙というのがあって、皆さんもご存じだと思いますが、ピンク色の「ガゼッタ・デロ・スポルト」という新聞を筆頭に、あと2紙あるんですが、ここに出てくる記事の8割がサッカーネタです。それが毎日書かれています。それはセリエAだけでなく、セリエB、

セリエC、それにアマチュアに関しても、少ないですが書いてあり、情報量が豊富だなと感じました。

親子でテレビ観戦という文化もあります。イタリアではスタジアムでいろいろ問題があって、スタジアムに行ってみるといふサポーターが減ってきているのですが、テレビで観戦している人がものすごく多いです。日本でも、かつて野球の放送が盛んで、お父さんが野球をみていて子どもも一緒にみるという、そういった文化に似ていると思います。サッカーを一緒にみて、お父さんがプレーの説明をしたり、ああだこうだ親子で議論するといふところがすごくあると思います。

また、パールでは、近所のおじさんたちがおしゃべりで討論をしています。パール文化と言つて、朝コーヒーを飲むという文化があるんですけど、そういうところに行つておじさんたちが話している内容といふのも、やはりサッカーが多いです。昨日の試合をみたか、あそこのプレーはどうだったか、そういうところでも議論しているんですよ。

生活の一部にサッカーが入っているといふことで、いやがおうにもサッカーの情報が入ってくる環境であります。そうすることで、プレーしている、サッカーに関わっている人だけでなく、みる人たちも目が肥えていきます。そういう人たちが言っていることが、正しい、正しくないといふことではなくて、サッカーについて語る、そして知識がどんどん入ってくるという文化があるのかなと、すごく感じました。

プレーの環境について、小さな町から大都市まで無数のクラブがあり、誰もがプレーできる環境があります。ど田舎の小さな街から大都市まで、どこに行つてもサッカークラブが存在します。そしてそれぞれのクラブがグラウンドを持って、更衣室を持って、そこに子どもたちが集まってプレーしています。そういうことで、子どもたちが試合に出られるだけのクラブ数、チーム数があります。高田さんも参加されたイタリア研修のときに、ある人が言つた意見なんですけど、日本と海外を比較して、日本の場合、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間だとして、計12年のサッカー歴があります。でも日本だったら、実際に試合に出てプレーしているといふのは4~5年くらいしかないんじゃないかと。なぜかと言えば、特に中学、高校の部活動で多いと思つたのですが、大所帯になつて試合に出られない人が多い。そうなつてくると、1年の時は球拾いしかしていない。2年生でやっと練習に参加して、3年生になつてやっとレギュラーになつた人は試合に出られる。こういうことを考えたときに、12年のサッカー歴の中で、4~5年は少し言い過ぎかもしれないですけど、半分くらいしかできていない子も多いのではないかと思います。それに比べて向こうは、12年やつていれば12年プレーする環境がある。その差といふのはすごく大きいのではないかと思います。こういう差をみていくと、最初の数年間は、サッカー文化や環境の差といふのが、実力差の最大の要因だと考えていました。

3) 視点の違い

しかし5年間イタリアで経験していく中で、特に感じた「視点の違い」に大きな差があるのだと感じました。

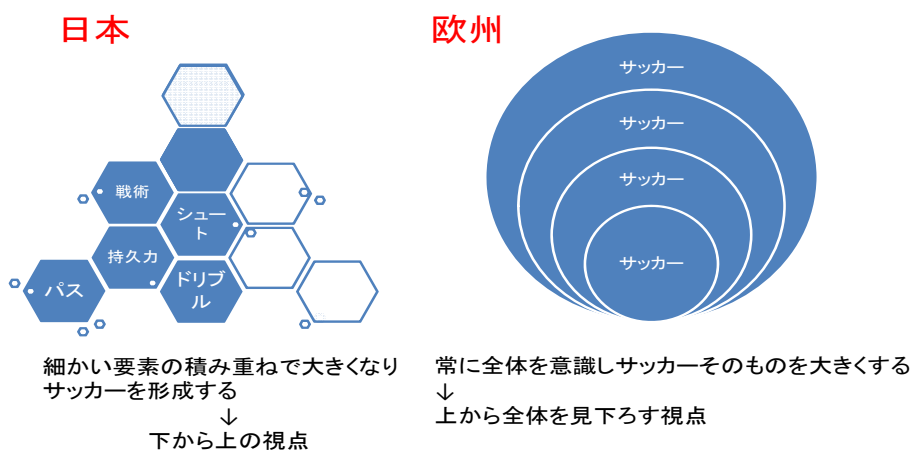
これは、イタリア研修に参加された高田さんたち受講生と話していて気付いたことです。最後の1年になつてはつと気付いたことなんですけど、まずその視点についてお話しさせていただきます。

日本の場合、昔からの文化にあるように、小さな努力の積み重ねが成功につながるという考え方を持っているように思います。この考え方自体、すごく大事な考え方だと思つたのですが、サッカーの場合も細かい要素に分けています。例えば、パス、ドリブルの練習、シュートの練習、そういう細かなものを積み重ねていき、サッカーを形成する。視点でいえば、下から上に積み重ねていくようなことがあるように、ぼくは感じました。

一方でイタリアの方は、つねにサッカーといふものを全体で捉えて、サッカーのトレーニングをして、それをどんどん構築していく。上から全体を見下ろす、全体を意識しながらトレーニングをしているといふ視点があるように気づきました。

この、欧州側の、全体像を捉えてトレーニングしているというのは、決して基礎の部分疎かにしているというわけではなく、まずはサッカーにとって何が必要か、必要なことを捉えた上で、細かなトレーニングもしているということで、やっているトレーニングがサッカーにつながっています。日本のトレーニングの仕方だと、それぞれの要素は上手くなるんですけど、それが試合につながっていないのではないかと感じるようになりました。イタリアの指導者と話をしたときに、イタリアでも小さな年代で技術を伸ばしていかなければという考えはあるのですが、ある日本人の指導者が「ぼくはいま、中学1年生を教えていて、技術を伸ばそうと、この1年ドリブルの練習をしてきた。次の年にはパスのトレーニングを中心にやっていこうかと考えています」と言ったんですね。するとイタリアの指導者は、何でそんなに細かく分けて教える必要があるんだと。サッカーにはドリブルも必要だし、パスもシュートも必要で、それらはトータルで必要であり、それがサッカーの技術であって、1つの要素だけを練習するものではないと言っていました。イタリアの考えとしては、つねに小さなときからパスもやるし、ドリブルもやるし、シュートもやる。上になるにつれて、そのトレーニングの難易度が上がっていく、プレースピードを変えていくという考えであり、つねにサッカーをトレーニングしていくということを言っていました。

視点の違い



4) 日本と欧州の違い

日本とイタリア・欧州の違いを挙げてみました。

日本は緻密な作業。これはサッカーだけでなく、工業においても緻密な部分を得意としています。これは日本の武器でもあります。もしかしたらそれが武器じゃなくなるのかなとも感じます。1つひとつのプレー、細かいトレーニングしていくことがまだまだ多いのではないのかなと。局面を重視した、例えば1対1や2対2のトレーニングが多く行われているのではないかと思います。その長所としては、細かい能力を集中してトレーニングするため、1つひとつの精度が高まっていきます。しかし短所としては、それぞれの能力を複合して行うことが苦手で、実戦で役に立たないということが起きてしまっているのではないかと思います。

一方で欧州では、全体をイメージしてトレーニングを行います。そして、そこから細分化したトレーニングを行っています。複数のものを組み合わせた複合トレーニングで、シュート練習をするにしても、シュートにいくまでの動き、例えばトラップからドリブル、そしてシュートにつなげてトレーニングをしています。また個人→グループ→チームへと順序立てたトレーニングをしています。小さなころからチーム戦術をガンガンやらせるというわけではありませんが、サッカーというのは

チームスポーツだから、小さいころ、個人の動きから少人数での動き、チームとしての動きを指導していると感じます。そういったトレーニングをしていく中での長所は、全体をイメージしたトレーニングも多く行っているなので、得たものをより実戦で活かすことができます。やはりサッカーにつながるトレーニングをしているということで、そのものがサッカーに活かされます。一方で短所としては、1つひとつの能力の精度を上げるのに時間がかかります。分けてやらずに、複合的に行う分、どうしても時間がかかってしまいます。

日本と欧州における違い

日本	欧州
<ul style="list-style-type: none"> • 細かく緻密な作業 • 一つ一つの技術を繰り返すトレーニング (パス、トラップ、シュート) • 局面を重視したトレーニング (1vs1など) 	<ul style="list-style-type: none"> • 全体をイメージしたトレーニング • 複数のものを組み合わせた複合トレーニング (トラップ→ドリブル→シュート) • 個人→グループ→チームへと順序立てたトレーニング
<ul style="list-style-type: none"> • 長所 - 細かい能力を集中してトレーニングするため、1つ1つの精度が高まる • 短所 - それぞれの能力を複合して行うことが苦手 実戦で役に立たない 	<ul style="list-style-type: none"> • 長所 - 全体をイメージしたトレーニングも多く行っているために、得たものをより実戦で活かせる • 短所 - 1つ1つの能力の精度を上げるのに時間がかかる 精度が低い状態での複合トレーニングはより難易度が高い

5) なぜ日本ではこのような問題が起こるのか

ではなぜ日本はこのような問題が起こるのか、ということを考えてみました。まずは、「技術」「戦術」という言葉の取り違えがあるように思います。小さいころに技術を学ぶべきだということは、イタリアでも言われております。ただ技術というのは、パス、ドリブル、シュート、もしくは体の使い方なども含め、サッカーに必要なことすべてを含みます。しかし日本においては、技術がある＝ドリブルが上手い、と捉えられている印象があります。また、日本では戦術を教えることを極端に嫌っているように感じます。ただ、戦術というのは幅広いものでして、チーム単位で行う複雑なものだけが戦術というわけではなく、サッカーをする上での方法を教えるようなものですので、小さなうちからでも教えられるようなこと、試合をする上で必要なことなど、教えることがあるのではないかと思います。

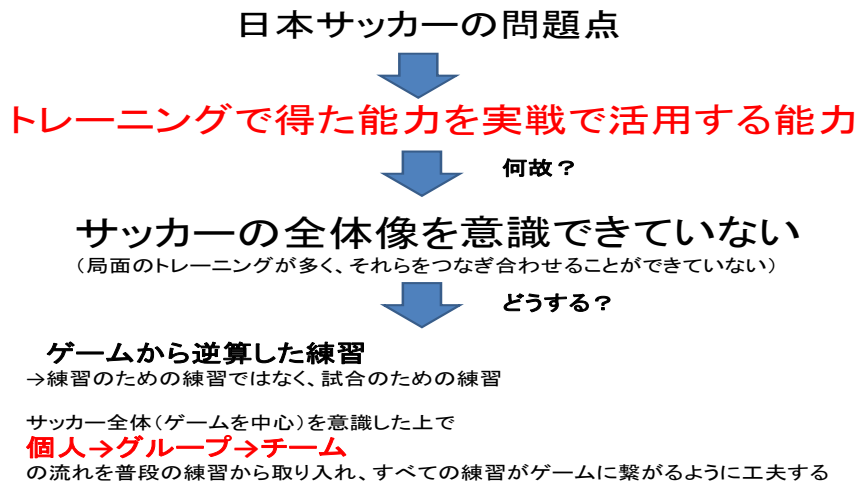
また環境的な要因ですが、小さいころに定期的な試合の場がありません。最近リーグ戦などが増えてきていますが、まだまだプレーできない子どもたちもいっぱいいると思います。そういう場がないとなると、不定期なトレーニングマッチばかりで、やはり公式戦と練習試合だと本気の度合い、集中の度合い、勝ちへのこだわりが違ってくると思います。競技スポーツとして、勝ちへのこだわりは、ぼくは必要だと思います。ただし、勝つために何でもしていいというわけではありません。イタリア人は、勝ちへのこだわりは非常に強い人種です。彼らは負けることを極端に嫌います。それは大人でも子どもでも同じで、しかもそれは教わるわけではなく、自然と備わっているものです。ぼくは、最後の1年、スクールで5～6歳の子どもたちを教えたのですが、練習の最後に必ず試合をやるのですが、負けたら泣いている子がたくさんいました。たかだかトレーニングの最後のゲームなのに、勝ちへのこだわりというのは、ぼくはすごいなと感じました。

狭いグラウンドで、大量人数でのトレーニングが行われていることも課題に感じます。やはり日本では、活動できるグラウンド数が確保されていないという問題があると思います。現実に学校の部活動では、他の部との共存の中で、狭いスペースで多くの人のトレーニングが行われてしまい、目が行き届かないとか、トレーニングとして不十分なものとか出てくるのではないかと思います。欧州では、小さなころから定期的に行われるリーグ戦があります。8歳くらいから定期的にリーグ戦が行われるようになります。小さな年代は11人制ではないのですが、5人制から始まり、6人制、7人制といった具合に増えていき、その中でリーグ戦が行われるようになります。毎週末に試合があり、そのためにトレーニングをするという環境が整えられています。試合があるということは、試合に勝つためのトレーニングをしなければ勝てません。もちろん小さなころは技術が伸びる時期なので技術トレーニングは割合的には多くします。ただ、それだけでは週末の試合に勝てないので、やはりサッカーはチームスポーツなので、戦い方を知らないといけないのです。そのため、小さな年代から、戦い方もすこしずつ教えるようにしていきます。決して勝利至上主義ではないものの、皆勝ちたい気持ちを持っていて、それが試合にも随所に出て、ずる賢いプレーも出てきます。ずる賢いプレーというのは、フェアプレーに反するという意見があるかもしれませんが、そういったものを大人が教えているわけではなく、自然と身につけています。彼らは普段からサッカーをみているから、大人のサッカーで起きることを自然と学んでいっているのですね。

1チームは適正人数でトレーニングされています。イタリアではサッカーをする環境が整っているから可能だと思うのですが、そうすることで適正な人数でトレーニングを実施できることは、イタリアの素晴らしいところではないかと思います。

6) 日本サッカーの問題点

日本サッカーの問題点として、私が感じたことをまとめてみました。



トレーニングで得た能力を実戦で活用する能力、日本人選手が持っている能力というのは、イタリア人の子どもたちに比べて劣っているということはありません。一番の問題点は、トレーニングで得たものを実践で活用する能力が欠如しているところだと思います。

それはなぜかと考えたときに、サッカーの全体像を意識できていないからだとぼくは感じています。日本ではまだまだ局面のトレーニングが多くて、それらをつなぎ合わせることができていない。つまり、サッカーの全体像を意識できていなくて、局面局面では能力を発揮できるのだけれども、それが11対11、サッカーの試合になったときに、上手く活用する術を知らないんじゃないかと感じています。

ではどうすればよいのか。それは、ゲームから逆算した練習をすればよいのです。サッカーの練習は、練習のために行っているのではなくて、あくまで試合のために行っているのです。だから、サッカー全体という視点で捉えるべきではないかと思います。サッカー全体、ゲームを中心に意識した上で、その中で必要な「個人の技術・戦術→グループの技術・戦術→チームの技術・戦術」という流れを意識した上で、普段の練習がすべてサッカーにつながるようにすることが必要だと感じました。

こういったトレーニングを行っている人も多いかもかもしれませんが、その中でゲームで起こりうることを考え、ゲームを中心にトレーニングを構成していくべきではないかということを感じました。

こちらの情報提供としては以上です。ありがとうございました。

3. ディスカッション

高田：それでは、ここで質問のある方はいらっしゃいませんか。

名方：技術や戦術は、イタリアではどういう言葉を使っているのですか。

井田：技術は、テクニコといいます。

名方：アートではない？

井田：アートではなく、テクニコといいます。戦術はタッティカといいます。

1) 練習時間の考え方の違いと、練習以外の時間の使い方

秋元：ヨーロッパでは練習時間をぎゅっと凝縮していてユース年代だと1日2時間×週4日のトレーニングということでしたが、さらに下のカテゴリーだとどのくらいの練習量なのでしょう。

井田：中学校くらいですと週3回くらいで、週2回のところもありますね。小学生年代ですと、週2回くらいですね。

秋元：イタリアの場合、練習時間はすごく短いんですね。南米なんかではストリートサッカーが盛んで、サッカーが好きな子はそれこそ朝から晩までボールを蹴っているというようなイメージがあるのですが。

井田：イタリアではストリートサッカーをしている人はすごく減ってきています。田舎と都会ではまた違いますが、ミラノに住んでいたとき、ストリートでサッカーをする場所がなかったような気がします。家の中でお父さんとゴムボールを蹴っている可能性はあるかもしれませんが、普段の時間でサッカーをして過ごす人は減ってきていると思いますし、南米に比べたら少ないと感じます。

秋元：サッカー選手が子どもに「プロになるためにはどうすればいいですか？」と聞かれたときに、よく「いっぱい練習すること」と答えています。しかし、実際はそんなことはなく短い練習でも上手くなってプロになれると解釈していいのでしょうか。

井田：そう言えると思いますね。練習を多くしたら上手くならないのか、といたらそうではないと

思うのですが、短い時間でも上手くなることは、経験則から言えると思いますね。

中塚：関連した質問なんですけど、クラブで過ごしている以外の時間を、子どもたちがどう使っているのかすごく気になります。U-18の年代が週4回のトレーニングということでしたが、うちの高校も週4回のトレーニングです。全然強くないけど…(笑)。その中で、強くなりたければ自主練をしろよと言っています。イタリアでも週4回で上手くなるには、クラブでのトレーニング以外のどこかでボールを蹴っていると思うし、低年齢になればなるほど、クラブでのトレーニングは限られているだろうけど、遊びの中でもっとボールに触れているか、あるいはフットボールにつながるような、体を動かす遊びがあるという答えを期待しているんですけど、どうでしょうか。

井田：実際の家庭を見たわけではないのですが、兄弟がいて家の庭でボールを蹴っているという子もいます。でも、それ以外の時間でボールを蹴っているという話は、ぼくは聞かなかったですね。少し話がずれるかもしれませんが、イタリアは午前中が学校で、体育の時間は、あるにはあるのですが、あってないようなものなんです。週に1~2回で簡単なゲームをするくらいで、体を動かすのはサッカーをする時間くらいしかないんです。ですので、一般的にいう運動神経は、日本人の方が優れているんです。動きのぎこちない子がたくさんいるんです。でも不思議なことに、走り方は変だけど、サッカーになるとできてしまうというのがあります。そこで感じるのは、サッカーに必要なことはサッカーを通じて得られているんだということでしたね。

田中：たとえば小学生年代で、週2回のトレーニングの時間以外で、クラブに来てグラウンドでボールを蹴ることはダメなんですか？

井田：自分のクラブであれば、グラウンドがあいていれば可能ですけど、ただ来てやろうという子はいなかったです。

田中：そのクラブに来ている子が、他のクラブと掛け持ちでやっているということもないんですか？

井田：そうですね、掛け持ちはないですね。

田中：あと、ミラノ辺りではすごく冬は寒いと思いますが、冬になると室内でトレーニングをしたりしているのですか。

井田：ミラノの場合、雪が積もるといことはほとんどないですね。寒くても外の芝生でトレーニングできますから、外でやります。また、私の教えていた下のカテゴリーの子は、小さなドーム型の室内芝生のトレーニング場がありますので、そこで練習をしていました。もう少し上になると、外でトレーニングは普通にしていました。

田中：いわゆる総合スポーツクラブではないから、今日は他のスポーツを、とはならないんですよ。

井田：個人的にサッカーのない日に、プールに通っているという子はいますね。

田中：どこで遊んでいるんでしょうね。公園でサッカーをしている光景はみられます？

井田：いなくはないですけど、あまりみななかったですね。サッカーを習っていない子、特に外国人や移民の子どもなんかはストリートサッカーをしているのをちょこちょこみましたが。

田中：以前、マッサーロという選手がイタリアから清水に来ていたのですが、そのときのチームドクターに聞いたんですけど、彼が理解できないと言っていたのは、部活で毎日サッカーをしていることでした。運動会などで土のグラウンドで子どもたちが走っているというのはクレイジーだ、という捨て台詞を残したとも聞いています。運動会はないとは思いますが、体育以外で、学校で運動するということはないのですか？

井田：何回か、学校の陸上競技会というのをみたことはあります。ただ、そもそも学校にグラウンドがないんです。学校は勉強するだけのところという位置づけなので、基本的には高校まで、学校は午前中（13時半ころ）に終わるので、午後の時間は好きなことをやって下さいという感じなんです。運動をする子もいれば、音楽をする子もいたり、芸術をする子もいて、自分たちの好きなように使えます。学校の授業というのは、ちょこちょこあるんですけど、たまにイベントとして陸上競技会をやっているのをみたことがあります。

田中：サッカーを習っていない日は、たとえばバスケを習ったり、テニスをしたりする子はいるんですか？

井田：先ほどプールに通っているという子がいると言ったように、個人の自由ですから、そういう子もいると思います。

2) 地域によるサッカーの差

参加者：個人的にスペインが好きで、バルサとかセビリアとかが好きなんですけど、スペインではバルサやセビリアなど、地域ごとにサッカーの差がありますが、イタリアでは地域によってサッカーの差はあるのですが。

井田：スペインと一緒に、イタリアもクラブ主導でサッカーが変わります。ただスペインは、イタリアに比べて地域による違いは大きいので、それに比べると地域差は大きくないかなと思います。これはぼくの印象なんですけど、どこのチームもかたいサッカーをするなという印象があります。イタリアのサッカー文化として、カテナチオという言葉がありますが、守備的という意味で日本の解説では使われていましたが、もうカテナチオというのは存在しないですね。でも、守備を大事にするというサッカーはまだ残っていますので、小さなころからそういったことをさせるというのがあります。あとは、指導者によって変わるというのもあります。

小池：指導者によってサッカーの質が変わるというお話でしたが、正月にバルサのカンテラのコーチと話す機会があって、バルサらしいサッカーをしよう、という通じてしまう、クラブフィロソフィーみたいなものがあるようなんです。指導者によって変わるというのはどうなのでしょう。

井田：バルセロナというのは本当に特別なクラブだと思います。スペインの指導者に聞いても、バルセロナは特別なクラブと言っていますし、他のクラブではほとんどないと思います。イタリアもそういったものがない、というかあそこまでしっかりとした哲学を持っているクラブはみたことがないですね。

小池：クラブとしての一貫性をもった指導スタイルというのはどうなのでしょう？

井田：育成の年代から3バックをするところは基本的にはないですけど、4-4-2もしくは4-3-3のシス

テムを取るチームが多いです。クラブで一貫性を求めているか、求めないかということに関しては、聞いたことがないので正確にはわかりません。ただ、指導者が変わるとサッカーのスタイルも変わるので、サッカーの基礎を教えるという軸はあると思いますが、バルセロナみたいに、トップチームでやるためのサッカーを指導していくという感じではないように思います。それよりも、サッカー選手としての質を高めていくための基礎的な指導を育成年代ではやっていると感じます。

高田：今回イタリアに行って、3クラブをみたぼくの感想ですが、育成のところで、たとえばバルサのスタイルを目指すというよりは、どのチームも共通しているのは、サッカーをやっているということです。スペインでもイタリアでも、指導者はサッカーをすることでサッカーが上手くなると思っているのですが、まさにその通りです。先ほどの話にありましたが、常に全体を意識し、サッカーそのものを大きくするんです。たとえばゴールを決めるという目的があります。ゴール前の局面では、組み立てでは差があっても、バルサもインテルもさほど差はないと思います。プレッシャーの強度だとか角度などはクラブによって違うと思いますが、個人戦術からグループ戦術の話がありました。サッカーをするオーガナイズの部分ではさほど違いはない。つまり、スタイルの前でつながっているものがたくさんあるなど。だから、コーチが変わって多少戦術が変わっても、それほどぶれないんじゃないかなと。育成部長みたいな人がしっかりしていれば、指導者が変わっても、試合運びには多少の違いが出ますが、変わらないと思います。

3) 欧州型と日本型のトレーニングの違い

嶋崎：ぼくは高校のラグビー部顧問で、隣でサッカー部の練習をよく見るのですが、Hという監督は欧州型ですね。ゲームをやっているのを見ていて、うーんと悩んで、ピッと笛を鳴らして止めるんです。そこで指導をして、またゲームをはじめるというふうにしています。それ以前の監督の方々には日本型で、走るとなると1時間ずっと走るし、シュートをやると1時間でも2時間でもやり続けます。今は変わったなど。私はプラモデル法と呼んでいる、部品を磨いて組み立ててチームを作る方法を取り入れているんですが、これの欠点は、デシジョンメイキングが弱いことです。個々の局面は強いんだけど、ゲームになると弱い。H監督のサッカーをみていて、違うなど思っていたんですけど、なかなかよくわからないんですよ。ゲームだけさせていても強くはならないと思うんです。ゲームライクなトレーニングが必要なのは分かるのですが、そういったトレーニングの例を教えてください。

井田：ゲームライクなトレーニング…というよりも、まずこれをやればというのではなくて、ゲームの中で自分たちの選手はこれが足りないというのを抽出して、細かいトレーニングをしていくのが大切なんですよ。

嶋崎：うちのH監督の場合は、頭の中でゲームのイメージを持って、そのイメージと違えば止めて修正するというのが、1つのトレーニングであると考えてよろしいのでしょうか。

井田：そうですね。それが向こうの場合だと毎週末にゲームがありますので、それを週単位、年単位で捉えるんですよ。試合の中で出た課題を週の間で修正して、次の試合に臨む。そのサイクルが小さなころから回っているんです。1回のトレーニングだけでもそうかもしれませんが、サッカーのトレーニングを週単位、月単位、年単位でずっと繰り返していくというのが、向こうの特徴です。日本でもM-T-Mメソッドと言う考えがありますが、それが1回の練習だけでなく、週単位、月単位、年単位でやっているのが最大の要因なのかなと。つねに試合のことを考えてトレーニングを行っています。

安松：T 高校はゲームだけをやっているのではないですよ。ゲームで抽出した問題点を、トレーニングをするときに、たとえば4対4をしたり。Hさんのトレーニングがどんななのかわかりませんが、ゲームを止めて修正するという形だけでなく、ミニゲームをしたりしていると思います。スキル系のトレーニングはないんですか。

井田：もちろんあります。ただ、スキルトレーニングも試合で起こりうる状況をオーガナイズして行っています。

安松：グラウンドが狭いのと人数が多いというのがリンクしていると思うのですが、その問題の解決法が思い浮かばないのですが。

井田：たとえば大所帯のチームがあつてグラウンドも狭い、そのチームが毎日練習をしているとしますね。ぼくの意見は、それを毎日やるのではなく、半分に分ける。毎日トレーニングをしなくていいと思うんですよ、毎日ぎゅうぎゅう詰めでごちゃごちゃトレーニングするんだったら、何日かずつに分けて、Aチーム、Bチーム同じことをするのではなく、Aチームは週4回、Bチームはその他の日にトレーニングするなど、量より質にこだわる部分が重要じゃないかなと。

安松：100人くらいいる高校では、朝練、午後練、場合によっては夜練を、1チーム20人から30人にしてトレーニングしようとしているところがあると思うのですが、ぼくは日本の人口の問題もあるのではないかなと思うんですよ。それを言ってしまうと元も子もないんですけど。指導者の数はそこそこいると思うので。問題は場所と時間なんです。時間をずらすしかない。そこで指導者がずっといなければならぬという問題もあり、どうも解決策が思い浮かばないんですよ。そういうことの解決策について議論できたら面白いと思うんですけど。

名方：日本の場合は帰納的にトレーニングをやっている。欧米の場合、サッカーのイメージがあつてそれを共有していくと思うのですが、サッカーというものの考えが違うと思うんです。日本でいうサッカーとヨーロッパでいうサッカーの底辺というのが違うのではないかなというのが質問のひとつです。それから、全体的な力を得るためには何が必要ですか。まずはスキルだと思うのですが。あとは「サッカーとは何か」ということではないでしょうか。

井田：先ほど高田さんもおっしゃっていたのですが、国によってサッカーのスタイルに違いがありますが、統一されたルールがあつて、それ自体は一緒なんですよ。サッカー自体は一緒ではないのですが、大人のサッカーだと90分の中でのプレーのなかみは限られている。技術でいったら、パス、ドリブル、シュートなど、必要なものは共通する。ただ、それをどう組み合わせていくかが違う。その部分を個々にやっていくだけでは試合では使えない。

名方：そういうコーディネーション、組み合わせる能力をつけられれば強くなると。

井田：それが一番だと。そもそも分けて考えるというのがナンセンスというか間違っていますよね。

名方：つねに状況判断をして、いつも最適な技術を発揮するということですね。

井田：判断とは相手がいてのことなので、やっぱり必要なことですし、状況判断というのは必要な要素の1つですよ。状況判断の伴うトレーニングをもっとやっていくべきじゃないかと思います。

名方：コーチとしては、そのとき少人数の方がいいのですか。

井田：やはり1人のコーチが見切れる人数には限りがあるので。

名方：1人につき何人くらいですか。

井田：向こうの例で言ったら、マックス20名くらいですね。クラブによって違いますが、一チーム2人コーチがいるようでしたら20名を超える場合もありますが、1人で20名を超える人数をみるのは相当難しいと思います。

4) イタリアの試合環境

参加者：もう一回質問していいですか。クラブは多くありますよね。対戦するチームは地域にあるチームで、年間たとえば20試合くらいあるんですか。

井田：年代にもよりますし、年代が上がってくると地域の括りが大きくなっていきます。プロクラブの下部組織だと、日本のプリンスリーグみたいな地域区分で試合を行っています。

参加者：上の年代だと11人でやるのだと思うのですが、小学5～6年生だと何人制でサッカーをしていますか。7人制とか8人制ですか。

井田：そうですね。

参加者：飛び級の子もいるんですね。

井田：そうですね。ただ、レギュレーションがあって、詳しくはわからないのですが、14歳と15歳で一線があるんです。14歳でいくら上手くても、その上には行けないんです。

参加者：成長期が止まる時期ということなんですかね。

井田：そういう問題もあると思います。それ以外だったら飛び級もあります。

参加者：そうすると、年間50試合はやらないと思いますが。

井田：子どもの場合はそうですね。もちろん地域によってはチーム数が少ないので、試合数が少なくなるところもあります。全部が全部、1年間やっているというわけではないです。同じ相手と2回、3回対戦することもあります。

参加者：わかりました。ありがとうございます。

井田：向こうは大きく12歳までとそれ以上のところで分かれます。日本語でなんて言えばいいのか難しいのですが、競技志向のリーグ戦であるアゴニスティカと、プレアゴニスティカです。プレとはプレシーズンとかに使われる「前」という意味です。12歳以上のアゴニスティカから11人制です。そこからサッカーを本格的にやる。それまでの年代は、準備をするということで、年代に合わせてレギュレーションも、人数も、コート大きさも違います。日本で言う小学生年代では11人制のサッカーはやらないけど、11人制サッカーの準備期という感じです。その中でリーグ戦を行っていま

す。

フロア：じゃあゴールの大きさも違うんですか。

井田：違います。

中塚：それはイタリア全体で統一されているんですか。

井田：イタリア協会のルールで統一されています。

5) フィジカルトレーニングについて

フロア：フィジカルトレーニングの考え方も、14、15歳では違ってくるのですか。

井田：コーチによっていろいろと変わってくるのですが、一般的に言われているのは、15歳まではフィジカルに特化したトレーニングはしないということです。ただ、個人的には、その年代でもできることはあると考えます。もちろん、マシンを使った筋力トレーニングを小さい年代からするべきだとは思いませんが、小さなころからできるフィジカルトレーニングはあると思います。ただ、ボールを使ったトレーニングに比べると、割合としては小さくなるでしょう。

フロア：ラダーとか。

井田：そうですね。そういうものを使ったコーディネーショントレーニングも1つですよ。そういうものは取り入れています。ぼくは半年間ACミランの育成部で研修させてもらっていましたが、そこでは、もちろん施設が整っているからというのものもあるでしょうけど、骨年齢を測る機械があるんです。骨年齢が15歳以上になってから、マシンを使った筋力トレーニングをはじめます。それまでは自分の体重を使ったトレーニングをするという基準線を持っていました。16歳になっても、骨年齢がそこに達していなければやらないし、骨年齢を基準にして、個別に対応しているところもあります。

フロア：日本では年齢でいうと12歳くらいから15歳くらいで、持久的なところを重要視していますが、どうなんでしょうか。

井田：イタリアでも素走りとか行われたりはするのですが、今はサッカーの中で持久的な能力を高めたいこうという指導者が増えていきますし、実際にそうするところが多いですね。サッカーのトレーニングの中でも持久力は養えるとぼくは思うんです。サッカーの中で鍛えられたフィジカルは大事にしていかなければと考えます。

6) オンとオフ

田村：感想になってしまうかもしれませんが、全体というのがポイントだと思います。考え方として、要素を足しても全体にはならないということですよね。要素とその連関があってはじめて全体になるのであって、一つひとつの部分の部分を合わせても全体にはならないという考え方は、一つの転換になると思います。日本サッカー協会技術委員会、筑波大の人たちが多いのですが、その方たちがやろうとしていることは、要素に分解して一つひとつのクオリティを高めていくと。そこでの成果がユース年代での活躍だと思っただけで、まさにこれまで日本でやっていることが限界にきているということなんでしょうか。だからユース年代の考え方を転換する時期にきていると、ぼくは思っ

います。ぼくも基本的には井田さんと同じことを言っているんです。でも JFA アカデミーでも、そういうことは全然吸い上げられない。ぼくは、おっしゃられていることはすごくわかるし、全くその通りだと思うのですが、だからどのように変えていかなければならないか。まさに全体というところが日本の課題だと思います。個人的な意見として、日本とヨーロッパは違うなど。何が違うかと言われれば、具体的に何とは言えないんですけど、たとえばヨーロッパだとひと言言えばみんなわかるんですよ。「あいつはプレーしている」と。今回の日本代表戦で、みんな「プレーしていた」と言うんですね。「プレーしていた」と言うことでわかり合えるということがあるじゃないですか、漠然としたイメージとして。「サッカー」と言えば、向こうは漠然とイメージできているのがわかるんですけど、具体的に何かということが言えないというベーシックな問題があります。要素のところ、個人のスキルからチームのスキルというところからゲームを意識してトレーニングしていくと。オシムさんが言っていることなだけで、試合で起こりうることをすべてトレーニングすれば予測できると。うまくいく、いかないは全部予測できているかどうかだと思うんですよ。予測できていないから対処できていないし、そこもサッカーという全体に関わる問題なのかなと思っていますのですけれども。

名方：お話をうかがっていて感じたのですが、サッカーのスキル以外に、人間としての総合力が重要である点です。それが備われれば、欧州のサッカーに負けないようになるのではと感じました。この点はサッカー以外にも言えることだと思います。

田村：人間の問題というのはすごく大きくて、昔ワールドユースで準優勝したときに、「本山が 10 キロ体重が増えて本当の大人になったときに、日本はトップにいけるんだ」という話をトルシエがしていました。そういうことも含めてサッカーで、日本人が考えているサッカーと別の部分を見ている。ヨーロッパ人がサッカーをそうやってみているのかなって思っています。それはイタリアも同じだと思うんですけど、

幸野：田村さんがおっしゃったことに関して、JFA アカデミーの話で、私の息子が第一期生で入って、クロード・デュソーに 4 年間教わって、私も間近で勉強させてもらいました。要素還元法からサッカーをサッカーとして考えていく方向では、実際 JFA アカデミーでもそうしているかなと。デュソー氏のトレーニングの中でいろいろとあるのですが、彼が課題視していることは根本的な問題で、日本人がサッカーをやりすぎていること。ヨーロッパの人たちは全然サッカーをしていないんです。ドイツでも、ユースは週 2 日休まなければならないという決まりがある。私が何を言いたいかというと、日本人はメリハリがなさ過ぎるんですよ。つねにオンなんです。ある強豪高校は、365 日のうち、2 日しか休みがないんです。デュソー氏も言っていましたけど、これでは人間的にゆとりがないし、人間性も育たないままになってしまうと思うんです。ヨーロッパではシーズンオンとオフがあるじゃないですか。日本の子どもには、実際にはオフはないんですよ。一年中サッカーをしているんです。ぼくはそこに問題があると思っています。日本の文化だってそうになっていて、サラリーマンのサービス残業で成り立っている社会。そういうところに日本人の勤勉性が潜んでいると思います。それはサッカーをやる上では非常にマイナスに働いてしまう。オフがないから、やらなければならないときのハイテンションさが足りないんです。ぼくがヨーロッパの多くの国の育成機関に勉強しに行った結論がそれで、子どもに対してもそう教育してきました。そこはまだ成功への途中なんですけど、ぼくはそう思っています。

井田：オンとオフということに関して、日本になくて彼らにあるものだと感じます。本当にそれがはっきりしていて、試合になるとスイッチが本当に入るんですよ。練習では不真面目なやつが、試合では何で人が変わったようにこんなにできるんだと。でもそれはオフがあるから、オンになる

んですよね。つねに一定だとそれが出せないから、日本だと 80%の力を出し続けているけど、彼らは 50~60%くらいから 110%くらいまでポンと一気に上げていくんですよ。オフがあるから、オンがあるのかなと。

幸野：デュソー氏もそれを言っていました。日本人のサッカーは特徴ないと思っているかもしれないけど、100メートル離れて見ている日本人のサッカーがわかるぞと。ミスしてボールが行き交ってばかりいるぞと。同じスピードでやっている。サッカーの中でスピードが速いというのがわかるかと聞かれて、遅いときがあるから速いんだぞと。ゆっくりやる時から速くやる時が必要になるわけだけど、日本人は常にせわしなく慌ててやっている。メリハリが大事なんだと。日本人のメンタリティがそうなのかもしれないけど、サッカーに入ったときにスイッチが入る選手を育てていかないと、いくらやっても変わらないぞというのが、75歳で引退した彼の言葉です。そこを真剣に考えていかないといけないと思うんです。

井田：まさにその通りだと思います。日本のチームがイタリアに遠征に来ることがあったんですけど、はじめイタリア人は、日本人のスピード感にビックリして、ついて行けないんです。でも、一定のリズムをずっと続けていくから、後半にはイタリア人はそれに慣れてしまうんですよ。プレーを修正していくんです。せつかく、イタリア人も驚くスピードを持っているのに、それを上手く使えればもっと効果的なサッカーができると思います。話が元に戻るかもしれませんが、そういうことも含めて、サッカーにはそういうことが必要だと。だからトレーニングにもそういったことが必要なんじゃないかなと思います。

幸野：イタリアにいたとき、メチャクチャ夜遊びしたでしょ？

井田：ぼくはそんなに（笑）。

幸野：彼らはメチャクチャ遊ぶんですよ。サッカーのときはメチャクチャ真剣にやって、夜は夜通し遊ぶんです。でも、日本だとそれがネガティブに言われるわけじゃないですか。そのへんも違うんですね。

井田：そうです。夏休みも、子どもたちには1ヶ月、2ヶ月の休みがあります。6月半ばから1ヶ月以上ありますから。その期間は全く練習しませんよね。それもオフでしっかり養ってから、オンシーズンになってガツと戻ってくる。やっぱり、オフがあることで精神的にもゆとりを持てるというか、そういった時間で家族や友達との触れあいとか、それが人生において大切なことになっていくのかなと。オフの使い方が上手いなというのがありますね。

幸野：日本が強くなるには、休むことなんですかね。

井田：休むというか、成長する上で必要なことだと思います。トレーニングもそうだと思います。中学生年代だと持久力がアップするから、そういったトレーニングをしっかりするべきだと。でも、し過ぎることによって、たとえばオスグットになってしまったりしばらく休まなければならなくなったら意味がないわけです。量を抑えることによって、そういったことを押さえることができれば、ずっと練習することができるので成長できるんです。量だけをやればいいという考えは、ぼくは間違っていると思います。

幸野：ちなみに JFA アカデミーでは、12歳から15歳までの間に、心肺機能を高めるトレーニングで

素走りは一切やらないですね。トレーニングではすべてボールを使っています。

井田：そういうことは十分可能だと思いますが、そういったことを知らない指導者もまだまだ多いと思います。そういったことをどんどん発信していけば変わっていくのではないかと、個人的には思っています。

7) 指導者の哲学

赤尾：そういう考え方は、イタリアでは国の指導者の中で、どうやって共有されているのでしょうか。

井田：他の国もそうだと思うのですが、日本はどちらかというと協会が発信して地域に広がっていくという形が多いと思うのですが、向こうは本当にクラブが主体なんですよ。クラブの指導者がそれぞれの考えを持っていて、その考えを持っていることがまずすごいことで、それをクラブ毎、指導者毎に行っている。その情報は、国が発信しているというのは、あまりないです。講習会が開かれるというのはちょこちょこあるのですが、イタリアサッカー協会が発信して、こういう方向に進んでいこうというのはほぼ一切ないですね。

赤尾：クラブで共通した方向性があると伺いましたが、イタリアの中ではここでいう日本式のトレーニングをしているということはないのでしょうか。クラブが考え方を持ってやる中で、考え方が統一されていくということでしょうか。

井田：そもそも、多くのイタリアの指導者が持っている考え方は、欧州式のトレーニングの考え方は、もちろんドリルトレーニングとか素走りとかもしますけど、それを上手くゲームに活かすトレーニングを行っています。それが上手くいっているから、結果が出ているのかなと。ぼく自身の感想は、そういった考え方を持っているからできている、それが普通になっているのではないかと。日本ではそういうのがないから特別なようにみえるけど、そういう考え方が一般的であって、特別考えて行うことではないです。視点が違うというのは、つねに全体をみているからできている。

赤尾：ぼくもクラブの中でたくさんの指導者と話をしますけど、イタリアでは欧州式のトレーニングの考え方が根付いているのだと。ぼくもやはりそちらの方がいいのかなと思います。そこを模索しているところです。シュートにしても細かくなってしまうんです。

井田：細かいトレーニングもすごく大事なんです。では、試合から考えて、なぜそのトレーニングをするのかという、最初の基準をゲームから考えて、このケースでこういうことが必要だからこういうトレーニングをするという、そしてそれをゲームで活かすためのやり方を考えていかないと。試合で必要だからこれをやりましょう、で終わってしまったら、意味がない独立したものなんですよ。そうではなくて、試合の中でこれが必要だからそれをやって、試合の場面で出るトレーニングを考えて行かなければならないのかなと。すごく抽象的な話ですけど。

高田：ちょっと言うと、欧州ではこれを全然やっていないというわけではなくて、もちろんやっている。ジグザグドリブルから、それをトップスピードでやれとか、思いっきり蹴れとか。たとえば日本で、カウンターで1対1の場面ではできるだけ早くゴールに近づいて打ちなさいと言ったら、そればかりをずっとやっています。だけどこっちで同じトレーニングをした場合、1対1だけでなく他からのプレッシャーなど、ゲームで起こりうる要素をちょこちょこ取り入れているという違いがあります。それを、ミランやパルマだけでなく、街クラブを見学に行って、ぼくらのようなおっさんコーチでもすぐにそういうオーガナイズをする。それは歴史の中で、サッカーとはそうい

うものだというのが根付いているのだと思うんです。環境、歴史的背景、文化的背景のせいにするつもりは全くないけど、ヨーロッパの街クラブの指導者が、個性はあるのですが、ベースが全然違うんだと、普通の街クラブのコーチからみて思いました。じゃあ全く勝てないのかといたら全然そういうことではなく、先ほどの俊敏性だったり、こういう理論をトレーニングに落とし込んだらすごく簡単だと思うのです。実際に私もそれをやってみて、関わっているチームもすごく変わりました。割とドリル形式のトレーニングを日本ではやっていて、クローズドスキルが上手ければ上手いと考えてしまう指導者が、私も含めていて、その部分をゲームに落とし込もうという指導者のスキルが違うと思うんです。イタリアに行った研修メンバーと、なぜそうなるのだろうと話をしたときに、日本の指導者は努力していないからという声が挙がりました。都合が悪かったら全部協会のせいにする。向こうはそれをクラブ単位でやっていたり、街クラブの指導者がビッグクラブに聞きに行ける環境があったりします。たとえばインテルに集まって、平日の、みんな仕事をしているような時間帯に、指導者同士で意見交換している。日本では、東京・大阪でJFAの伝達講習会をやるような場合、「各クラブから絶対に参加すること」と言われなければ来ないんです。そのベーシックな部分。「協会のやっていることはよくわからない」だとか、「エリートと街クラブの選手は違うのだ」という勝手な誤解。そういうベーシックな考え方がすごく違うなと思う。少しの差だと思うんです。勤勉さを活かしてやれば追いついていける気がします。

田村：ヨーロッパで育成というのを意識しはじめたのが70年代前後からです。はじまっているのはそこからです。またバルサの育成環境がすごいという話がありましたが、それもせいぜい20年くらいですから、今からやっても大丈夫だと思うんですよね。話を聞いていて、イタリアの場合はクラブによってそれほど特徴の違いはないのかなと感じたのですが。

井田：そうですね。あとビッグクラブと街クラブで大きく違うのは、ビッグクラブはどんどん選手を取ってくるんです。育成といっても、2つタイプがあると思うんです。いまいる選手を上には伸ばして行くタイプと、インテルやミラノのように選手の入替わりが多く、どちらかという競争する環境を与えてふるい落とししていき、残った選手がスターになっていくタイプと。

田村：ピラミッド型になっているんですか。ミランが頂点にあって、街クラブから吸い上げていくようなシステムになっているのでしょうか。

井田：そうですね。いい選手を大きなクラブが取っていきます。小さなクラブは、そこに選手を売るというか、売ったお金で自分たちのクラブをやっているというシステムです。

フロア：やはりその競争は激しいのですか。たとえば選手の取り合いですとか。

井田：そうですね。スカウトが発達していったばいいますし、選手側も、若くても代理人をつけるんですよ。早い選手で15~16歳からついてきます。昨年ブレスシアというチームに行ったのですが、当時14歳の選手で、その監督が将来プロになるよと言っていた選手が、1年経ってすでに5億円の値段がついている。彼にも代理人がついて、取り合いになっているという話です。彼はクラブの持ち物なんです。クラブと契約しています。

牛木：でも今の規則では、最大5年までの契約しかできないんですよ。そうすると15歳で5年契約をしても5年しか拘束できない。でも、選手も出ていきたければ、短い契約をしたい。ボスマン判決以前は、契約が切れてもクラブに保有権がずっとあったわけです。今は契約でしか拘束できない。そうすると選手を育成するモチベーションが上がらないということになる。インテルやミランはど

ういう契約をしているかお聞きしたかった。

井田：契約に関してあまり詳しくわからないんですが、プロ契約をしている選手とは少し違ってくると思います。プロ契約をしてトップ登録をしてしまえば、もちろん他のプロ選手と同じ契約形態になると思いますが、育成の場合は長い契約を行っているのかというのはちょっとわかりかねますね。

秋元：育成について意見を言わせてもらいます。育成方法を「日本型」から、サッカーを大きな視点で捉える「欧州型」にしていけばいいという考え方を伺いました。先ほど高田さんは「日本型」から「欧州型」への移行はすごく簡単だというお話をされましたが、僕は反対にすごく難しいのではないかと感じています。日本型の指導法というのは、パーツごとに評価するので選手の見極めが容易です。持久力は測ればわかりますし、ドリブルも見れば上手いかどうかわかります。部分部分で見えていくやり方は指導がしやすい。一方、欧州型の「サッカーを教える」という指導する際は、指導者が確固たるサッカー哲学を持っていないかならぬと思うのです。ゲーム状況を選手が自分で判断し、状況に応じたプレーを選択できるようになるには、小手先のトレーニング方法を変化させるだけでは難しいのではないのでしょうか。ピッチ環境や相手のレベルなど、まったく同じシチュエーションの試合は二度とないわけですから。本当にサッカーを理解して、確固たる哲学を持った指導者が増えないと、どうにもならないと思うんです。何を持ってサッカーを理解したといえるのかぼくもわからないのですけど。子どもたちを指導をしていて感じるのは、日本型から欧州型への移行は10年、20年、30年やっても到底追いつけないくらい高いハードルなのではないかと。日本で育成年代を教えているのは勉強中の若い人たちが多く、僕も含め彼らの多くはまだサッカー哲学を確立させている最中だと思うのです。だから日本型から欧州型への移行はだいぶ時間がかかるように思います。今日ここに集まった方でも、「サッカーとは何か」という問いに対して、納得できる回答を与えられる人は誰もいないでしょうし。

奥山：確認になってしまうのですが、僕はいまフットサルをやっていて、通常のシュートよりも、ボールが浮かないシュートの方が得点できるのではと考えて、ゴロのようなシュートを打つ練習をはじめたんです。これは練習のための練習なのか、試合のための練習なのかどっちなのかなど。結局ゴロのシュートの練習をして、ゴロのシュートが上手くなったからといって、試合ではゴロじゃないシュートも打ちますよね。だから、試合中の各場面で、練習の成果が活かされてはじめて上手くなったと思うんですよね。シュート練習で上手くなっても、試合で判断して活かさなければ、成長したと言えないと思うんですよ。そして、試合で使えるようにするために、シュートを打つ前の段階でフェイントを入れる必要があるな、など、自分で練習のメニューを組み立てていった場合は欧州型のトレーニングになるかと考えたんですけど。

井田：なんでフェイントを入れようと思ったのかというのは、試合でやっていて思ったわけですよね。

奥山：そうです。

井田：ゲームから考えて、試合に必要なことをトレーニングして、またそれを試合で活かすことができたのであれば成功じゃないでしょうか。

奥山：そのサイクルをぐるぐる回していけばいいのかなと思うと、次の質問ですが、選手はそういうことをあんまり考えないんですか。自分はどうしたいかということ。僕はゴロシュートを打ちたい、また目の前の選手が邪魔くさいからフェイントを入れたい。僕の場合は、コーチがいないから自分で好き勝手に練習を組み立てられるんですけど、日本の練習環境はどうなんですか？

井田：自分でそれを子どもたちの段階でできればすごいことだと思うんですけど、それがなかなか難しいから指導者が必要、教えることが必要なんじゃないかなと、ぼくは思うんです。考えさせることが必要とよく言われますが、選手たちの引き出しの中に何もなければ教えることも必要なんですよ。教えられたことを選手たちは引き出さなければならない。じゃあ指導者の役割の1つは、そういう引き出しを増やしてやることだと思うんです。だけど、すべてこうしなければならない、というところまでやってしまうと教えすぎだと思います。バランスがすごく難しいところですね。もし子どもたちが考えられるレベルであれば、それはすごいことだと思います。残念ながらそういう子どもたちはなかなかいないと思います。また選手と指導者でみる視点は違いますから、指導者は指導者の視点から手助けしてあげるのが役割なのかなと思いますけど。

奥山：先ほどの話の続きで、シュートやフェイントは自分で気付いたので、それをお前もやれよとチームメイトに話をしたんです。彼もいやつなので付き合ってくれたのですが、残念ながら、僕から言われたからやるという意識なので、彼はあまり上手くならなかったんです。

井田：じゃあそれをどんな場面で、どうして必要かというのを理解してなければ、単にキックが上手くなっただけで、使いどころを知らないというのはまさにそういうことなんですよ。

奥山：ということは、試合で活きる練習をしているかどうかは、選手のモチベーションによるものかなと、いま話を聞いていて思ったんです。

井田：そうですね。選手のモチベーションが上がらないのは、試合でどうしてこれが必要なのかをわかっていない、それがわかるとまた成功するわけですよ。わかっていると使い分けができる。それは刺激の仕方によって変えることができます。それも指導者の役割の1つですね。なんでこのトレーニングが必要なのかというのをわかっているのと、わかっていないのではモチベーションが全然違うんです。この練習をやらされているからやっているというのと、こういうのを必要だと選手が感じながらやるのではモチベーションが違ってきますよね。そういうことができるのが、いい指導者だと思うんです。

奥山：最後に意地悪な質問なんですけど、逆に僕は全然ドリブルをしないんですよ、あまり面白くないので。ドリブルが出来る方がいいのは、みても聞いてもわかるんですけど、全然やる気が出ないんです。そういうのって、色んな場面で起きているんじゃないのかなと思うんですが。そこをコーチしても効果は上がらないんじゃないですか？

井田：じゃあドリブルが必要ないかといえば必要なわけで、サッカーにはドリブルが必要な場面ってありますよね。その必要性を認知させることができれば、ドリブルをするようになります。そういったものを気付かせなければならないのが、指導者なんです。やりたくないからやらないだとサッカーはできないです。

8) 子どもたちと指導者の関係

井田：これをしたというのはいらないですね。日常では向こうは教え込むトレーニングが多いです。これをやるといってトレーニングを進めていきます。でも、彼らはしたいという願望を持っているんですよ。これをやれといっても、勝手に自分の好きなことをやってしまうんですよ。日本人はこれをやれといったらこれしかやりませんが、向こうの子たちはそう言われても、勝手にやっちゃうんです。監督に何をやっているんだと言われても、向こうの子たちがすごいのはそれに反

論してくるんです。いや、俺はこういう場面だったからこれをやったんだと言う。それを自然に、そういう受け答えをできるのが、向こうの子たちのすごいところです。これは他のところで話をしたんですが、指導者と選手の関係が決して縦の関係ではない。もちろん監督のことをリスペクトしていますが、監督と意見を言い合うことは決して悪いことではなくて、向こうの子たちは平気で自分の意見を言います。ただそれが単なる言い訳の場合もあります。屁理屈だけの場合もありますし、責任逃れということもありますし、だけど的を射たことを言うこともありますし、そういった屁理屈かしっかりした考えを持って言っているのかは、ちゃんと指導者が判断しなければならないです。屁理屈や責任逃れだったらちゃんと指導しなければなりませんし、指導者としてこういうやり方もあったよねと言うこともできます。一方通行ではないんですよ。

高田：パルマに行って、U-9 のカテゴリーの紅白戦をみたんですけど、ハイと素直に言う人は誰もいなかったです。何で戻らないんだと聞かれて、疲れたからだと堂々と言う。それで怒られたりもするんですが、中には囲まれてパスができなかったことを指摘され、自分の角度だとパスコースがみえなかったと自己主張する。それでコーチと試合中言い合いをするのをみたんですけど、そこは日本と違うなと感じました。

井田：それでも、コーチと選手は気まずくならないんですよ。イタリア人と関西人がすごくよく似ていて、ユーモアを含めて言い合っているの、気まずくならないんです。それを言われたからシュンとなる子もいないし、冗談で返してすごくコミュニケーション能力が高いなとも思います。日本と比べたらすごいなと思いましたね。

田中：すみません、ちょっとだけ。いま部活が崩壊しているんです。静岡ではクラブチームがいっぱいあって、そこでは週3回くらいしか練習しないんです。だけど自分で練習しちゃう子もいるし、陸上やサッカー部に入っている子もいるので、練習量はトータルで多いです。だけど、心ある指導者もだんだん出てきて、一ついいのは、学校の先生が指導していないから、たぶんいまおっしゃったように、コミュニケーションをとっている場面が多くあると思うんですよ。昔はオスグット病でサッカーできないねと言うと、診断書を持ってこいと言う先生がいて、部活動を3ヶ月休むのが本当に大変だったんです。今はそんなことは一切ないですよ。講習で習ったから知っているよ、というコーチがいて、できる所とできない所を判断してトレーニングをしているみたいなんです。静岡ではそうしたクラブチームがどんどん作られ、できてきているんです。そういうところに、こういう知識を還元して欲しいなと。20代の元Jリーガーが就職先として教えているのがいいのかどうかかわからないんですけど、小さい子ほど人生経験豊かな人がやっているというのが、だんだん日本もそうなっているのではないのかなと。そういう明るい未来があるんじゃないかと、ぼくは思ったんですけど。

井田：向こうは育成年代のスペシャリストの指導者が結構いるんですよ。日本の場合はそれが少なく、プロを引退して駆け出しのときに育成年代の指導をしている。でも上の年代やプロを教えたので、ある程度経験年数を積んだら上に引き抜かれていくことが多いんです。向こうも育成年代からプロの指導者になる人も多いですけど、スペシャリストの指導者が結構いるんです。

フロア：それが1つの職業として成り立っているのですか。

井田：ただ、プロクラブでも育成年代だとお金をほとんどもらえないんですよ。お金のいるクラブで潤沢であれば、プロ契約を結んでそれなりにお金も出るんですけど、ぼくがペルージャの育成に1年間いたときは、みんな午前中は自分の仕事をしていました。パートタイムだとかボランティア

の指導者がいっぱいいるんですよね。そこでも育成部長だとか、育成に力を入れているところでは、重要なポストに育成のスペシャリストを置いて、それで管理をしているところもあります。日本では仕事と両立させるのはなかなか難しい現状があると思うのですが、そういう意味では羨ましいというか。

フロア：ヨーロッパは2つの職業を認めている社会です。日本だと、パートだと「何この人？」と思われるけど、ヨーロッパだったらサッカーのコーチとパートをしても素晴らしい仕事をしているねと認めてくれる目があるからできると思うんです。日本の社会が変わらないと、片手間でやっている仕事だとネガティブにみられるじゃないですか。その辺が変わらないと難しいと思うんです。

9) おわりに

高田：そろそろ時間ですので、最後に井田さんから一言お願いします。

井田：すごく抽象的な話が多くて、具体的なイメージを持つのは難しい話だったかもしれないんですけど、最初にも言いましたが、ぼくがイタリアでみて感じたことというのが、見方が変わった、視点が変わったと言うところなんです。サッカーというのは答えのないものだし、奥深いもので、すごく難しいんですけど、難しいからといって考えるのを辞めてはいけないと思いますし、そこで何が必要なのかと。イタリアでやっていたトレーニングを日本に持ってきても絶対に成功しないとぼくは思っているんで、これから日本の子どもたちを知る必要があるなと感じていますし、その中で何ができるのかを常に考えていく必要があると思っています。話がうまくなくて伝わりづらかった部分もあったかと思いますが、サッカーをもっともっと勉強する必要があるとぼくは考えています。そういう指導者が増え、サッカーをもっと知っていけたら、そういう指導をできる人が増えていくのかと思っています。お互いもっとサッカーというものを勉強して、これからも頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。ありがとうございました。

(議論は尽きず、続きはルンで…)